

【書評】

## 比田井克仁『関東における古墳出現期の変革』（2001年）

Book Review of HIDAI Katsuhito “Transformation of Timing of the Appearance Kofun in Kanto Region”

小林 嵩

KOBAYASHI Kou

**要旨** 弥生時代後期から古墳時代前期の研究を関東地方において土器を中心に精力的に進めている比田井克仁が、自身の論考を一冊にまとめた『関東における古墳出現期の変革』の書評である。比田井の論考は、該期の研究において視点が偏りがちであった西日本だけでなく、関東地方における内的な要素も含め、土器資料を中心に実証的に論じた点に大きな成果がある。今後は土器以外の遺物や遺構を絡め、総合的な視点から関東における古墳出現期の社会象を考察していくことが課題となる。

古墳時代という時代は、初期国家とも呼ばれる社会構造が生まれた日本史上の大きな転換点である。古墳時代とは定型化した前方後円墳の成立に代表される時代区分であり、出現期の研究を含め、これまで多くの研究が積み重ねられてきた。研究の当初は、特に前方後円墳に副葬される副葬品の研究が先行して行われていた。そしてその研究は出現期を含め、前方後円墳の分布の中心である西日本において盛んであった。また、古墳出現前段階である弥生時代後期から、古墳時代前期という移行期の研究に関しては、土器の編年研究の重要性が認識され、小林行雄や田中琢に代表される研究者によって進められた。南関東地方においても研究が行われ、その編年案の大綱を示したのは杉原荘介である。杉原は弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年に関して、久ヶ原式→弥生町式→前野町式→五領式という順序を与え、ここに南関東地方の編年の大綱が示されることとなった。その後南関東地方や畿内地方においても、土器編年研究を基礎として墳墓等の遺構にそれを絡めた研究等も進んでいくこととなる。

しかし、南関東地方においては、早くは菊池義次によって杉原の編年案に疑問が呈されたのを嚆矢として、1980年代を前後して特に久ヶ原式と弥生町式に関しては、両者が地域を異にした併行関係にあるのか、それとも従来言われてきたように時期差として捉えられるものなのか、という点を主な論点として様々な議論が行われた。現状の研究の到達点から言ってしまうと杉原によって提示されたように、時期差として捉えられているが、前野町式や五領式も含め従来の編年観の見直しが強く認識されることとなった。また、その他の問題点として、型式の定義が曖昧なままそれが修正されずにあったことや、修正されないまま各報告書や論考で独り歩きをしてしまった、という研究史上の混乱も大きく影を残すこととなった。また、弥生町式に関しては実際の遺跡に当てはめた際の矛盾が大きいことや、その指標とされている東京都向ヶ丘弥生町出土の壺形土器が、決して在地の土器ではなく東海地方の影響を受けた土器であることが指摘されるに至り、現在では学史の中でのみ取り扱うものとなっている。このような様々な問題点が南関東地方の編年研究に関し

ては指摘されてきたが、大きな問題点としては菊池により指摘された通り、南関東地方という広範な地域を一つの型式で括って考えてしまったことにあると思われる。南関東地方の弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、このような土器編年研究上の問題点が大きく横たわっており、それを軸として進むべき墳墓や集落を含めた社会動態の研究というものが停滞傾向にあった。先駆的な研究として、小出義治や岩崎卓也が土器の年代・組成及びその分布等の要素を、弥生時代後期から古墳時代前期へという歴史的解釈の中で論じた成果がある。また、1993年の日本考古学協会の新潟大会シンポジウムにおいて土器研究と古墳・集落研究が連携を持つに至ったが、研究の深化が求められている。

著者の比田井克仁は、本書の中でこのような現状を鑑み、それまで停滞傾向にあった関東における弥生時代後期～古墳時代前期の歴史的な展開について、主に土器を対象として考察を試みている。まずは「序章」「終章」を除く本書の構成について示しておきたい。

第一章「対象となる年代観の検討」

第二章「古墳出現前夜における関東地方の様相」

第三章「変革の契機と史的展開」

第四章「祭祀の変革」

第五章「関東在地の内的対応」

第六章「定型化古墳出現前における首長の成長と系譜関係」

以下に、各章と各節の内容について簡潔に紹介する。

第一章では上述したような関東における土器編年研究上の問題点を整理する為に、編年の再構築を行う。第1節では、弥生時代後期の時間軸設定を南武蔵の資料から検討する。弥生時代後期を通じて見られる壺形土器の指数変化を基準として編年を行い、また壺と共伴する遺物を検討し各器種の変遷も提示している。南関東内で各研究者との編年の併行関係について検討し、中部高地系や東海系との併行関係を提示している。また、鏡や貸泉を基に実年代に関しても言及する。第2節では弥生時代後期に続き、古墳時代前期の土器編年について検討する。分析の方法としては器種組成に注目し、例えば新出の器種である、小型器台・小型高杯・元屋敷系高杯・柱状脚部高杯・小型丸底埴を主な対象としている。それらを軸に据え、南関東地方における各地の様相を検証し、他地域との併行関係を論じている。

第二章では複雑な様相を呈す南関東地方の土器様相について基礎的な検討を加え、その地域単位を把握することを目的とする。第1節では、南関東地方における弥生時代後期の土器について巨視的に概観し、実態の把握を行っている。河川を重視して6地域に分け甕・壺を大きく形態分類し、諸地域毎に検討した。その結果、刷毛を持つもの、頸部に段を有するもので地域色が存在することを明らかにし、輪積痕甕の分布域には前期古墳が出現するが、刷毛甕の分布域には前期古墳が発展することはなかった、と考察した。第2節では、輪積痕・ナデ甕と刷毛調整甕の共存地域である南武蔵地方を中心とした土器様相を整理し、その様相がいつから始まるのか、その様相が変わらず続くのか否かを検討し、その成立過程や史的背景にも迫っている。輪積痕・ナデ甕と刷毛調整甕が共存し、自縄結節文や端末結節文等の壺形土器等、菊川式系の影響と考えられるものを含む様々な系譜を持つものが渾然一体となる地域を抽出し、それを相模・房総とは区別すべきとして、南武蔵様式を設定し、その成立時期に言及している。そしてその契機は倭国大乱に求められると

言及した。

第三章では関東地方において弥生時代から古墳時代へという、時代の大きな転換期に多大な影響を与えたと考えられている、所謂外来系土器について検討する。第1節では、多くの研究者に頻繁に取り上げられる古墳時代前期の外来系土器ではなく、弥生時代後期の外来系土器に着目する。具体的には、南関東地方において見られる山中式・菊川式についてである。移動の開始時期を土器編年から導き出し、移動の契機が環濠集落・高地性集落の消長と時期的にも整合していることを指摘し、また南関東地方に到達した外来系土器が、南関東地方において受容のされ方に違いがあることを指摘している。そしてその背景について、倭国大乱から邪馬台国の出現に至る歴史事象と対応させて考察した。第2節では、東国における外来系土器について、特にその分布・年代観を中心とした現象面を追い、その基本的な認識と解釈・意義について考察する。外来土器を外来系土器（在地で定着しないもの）と外来性土器（在地で定着したもの）に分け、出自の異なる外来土器の分布と変遷過程を把握し、大略を掴むことで分析している。特に外来性土器に関しては、時期によって影響力を与えた地域（畿内地方・濃尾地方・北陸地方）が異なることを指摘し、最終的に畿内地方の影響下に置かれることを指摘した。

第四章では古墳時代出現期の東国において見られる、西方からの波及による祭祀の変革について考察する。第1節では、関東地方に広く分布する小型高杯を二大別し、その基本となる動きを、時期的な位置付けと系譜の解明と共に素描し、派生する問題点を確認している。杯部が椀状を呈するA類と、杯部に稜を有するB類に大別し、さらにその中で細別し、各地の出土状況を検討した。その結果、A類とB類には出自に違いがあり、時期的にはA類が先行するという結論を導き出している。そして、A類の祖形は中部瀬戸内地方に見出され、A類はその他を媒介として畿内文化の東進と共に南関東地方に入り、さらに東北地方に伸びていくとし、B類は東海西部地方に生じ、北陸地方へ向かうものと、東海東部を経て南関東地方に伝播するものがあるとした。そしてその次段階の時期に東海西部から畿内へ、関東地方から東北へ分布を広げていくとしている。そしてこれらの高杯は古墳の出現と関係があり、五領式・布留式の段階で消滅すると分析した。そのようなことから、小型高杯は出現期の古墳と集落を結ぶ唯一の特徴的な土器である、と考察した。第2節では、高杯について更に集落を中心とした系譜と展開を再確認して、南関東地方におけるこの時代の大局的、かつ客観的な把握を試みる。高杯を形態の分類からその出自等を検討し、さらに各地での高杯の系統・展開・特徴的器種との伴出関係を分析し、伴出関係をⅧ類型化した。その結果、庄内式期にB類高杯を主とし、布留式併行期前半にB・C類高杯、中葉以降にD類高杯が主とすることを明らかにし、そしてD類高杯の波及がある程度、畿内勢力の定型化した規制を持った集落内信仰に対する一つの政策のあらわれではないか、と結論した。

第五章では前章で検討を行った西方からの影響による祭祀の変革の流れに対して、関東地方の内部においてはどのような対応があったのかを検討する。第1節では、集落内から出土する小型壺を題材に検討をしている。まず、出土状態や出土位置から、小型壺の性格付けを行った。その結果、竪穴住居コーナー部における屋内祭祀に使用される役割を持った土器で、性格上祭祀を基礎においた集落紐帯を示すもの、と考えた。次に、分類と変遷を検討し、自身の編年と対応させた結果、弥生時代後期Ⅲ段階から出現し、古墳時代前期

I段階にピークを迎え、II段階には衰退し、III段階には見られない、としている。そしてその時期は環濠集落の解体に伴い、西方からの人々の流入が激しくなる時期でもある。そのような時期における在りでの紐帯強化・維持という側面が小型壺での祭祀を出現させた、と考えている。そして、畿内色が強くなる時期には消滅に向かっていった、とした。第2節では、伝統的な文様壺に着目し、古墳時代の前期に弥生土器の伝統性がどこまで尾を引き、どのような消失過程を示すのかを検討する。地域毎に様相を概観し、自身の編年に対応させ、形態上の特徴、文様の特徴を分析している。形態に関しては頸部が丸いA形態と屈曲の強いB形態に分け、文様をA～G類に分類し、そしてそれらの諸要素から、地域性を抽出した。その結果、I段階（新）になると簡素化する傾向を示す東京湾岸地域と、依然として伝統性に固執する相模湾岸地域（文様A）、大宮台地、印旛・手賀沼地域（文様F・G）に分けられる、としている。そしてII段階には相模湾岸を除き一斉に姿を消す、とした。また伝統的文様壺に見られるこれらの地域性は、そのまま前期古墳の形成に大きく関わるらしく、拒絶型の大宮台地・印旛・手賀沼周辺、漸移的衰退型の東京湾岸地域、併存型の相模湾岸地域に、という風にその特徴を見事に描き出している。そして、伝統的文様壺に見られる地域圏と小型壺祭祀の開始とはある程度相関する、と考えた。

第六章では、一～五章までの土器を中心とした研究を踏まえた上で、従来の畿内を中心とした大和政権の全国的浸透、前方後円墳体制の確立、という解釈を更に発展させて検討することを目的とする。つまり弥生時代後期～古墳時代前期において、尾張・美濃勢力と畿内勢力の双方が、どのように関東地方に意図的な働きかけをしてきたのかを検討している。土器の移動及び墳墓も含めた考察から、関東地方はまず南関東地方から順次、伊勢湾世界の社会構成を模倣しており、その象徴が前方後円墳であったとした。そして、その背後で勢力を伸張していた畿内勢力が、尾張・美濃勢力が席卷していた関東地方に拠点的に楔を打ち込んだのが神門古墳群等であった、と考えている。そして、その史的背景に狗奴国と卑弥呼、即ち邪馬台国との不和を考えた。

このように比田井は土器の綿密な検討を基礎に、その他の遺物・墳墓を総合的に捉えることで、関東地方における弥生時代後期から古墳時代前期という時代の転換期の史的背景について鮮やかに描き出した。昨今の研究状況として、研究分野の細分化が進み、土器の編年研究やその他の遺物、墳墓の研究というのは独立して扱われる傾向が強かった。勿論2013年現在もそういった研究の方向性は益々強くなっていると思われる。そのような中で体系的に論じた意義は大きい。

勿論残された課題も多い。例えば第一章の土器編年に関してである。比田井の弥生時代後期に関する編年の論考では、その基軸を南武蔵に据え、そこから他地域との併行関係を押さえている。しかし、昨今更に土器の精緻な研究が進み資料が増加した結果、なお検討が必要な事項が増えているのも事実である。例えば、弥生時代後期の久ヶ原式の研究に関してもその成立基盤を巡る見解に議論の余地がある。また、南武蔵様式と定義された中でも地域色のあることが指摘されている。その他にも弥生時代後期の関東地方には、かつては「白井南式」と呼ばれた土器群が存在する。比田井も「白井南式」について取り上げているが、詳細には触れられていない。南関東地方の土器群とは大きく様相を異にする縄文多用系土器群であるが、東京湾を臨むように分布しており当時の社会現象を考える上では重要であり、やや検討不足と思われる。古墳時代前期の土器編年に関しても、検討すべき

点は多い。比田井はその論考の中で、器種組成に関する変化を検討し、基本的な編年案を示し各地域の様相・特色についての的確に指摘している。しかし、各地域で取り上げた数遺跡で、その地域の特色は把握しきれていないと考えている。古墳時代前期においても依然として地域による特色は見られるのであり、在地の土器群を見極め編年の整備を行っていく必要性が残されている。また、器種組成に重点を置いて構築された編年案の弱点として、偶然その遺構から指標となる特定の器種が出土しない場合、対応できない点が挙げられる。例えば、小型器台や小型丸底埴がその器種組成変化の指標とされているが、このような指標となる土器が出土しなかった場合、時期決定が難しくなり、集落や墳墓の動向を論じる際にそれらの年代的位置付けが不確定なものになってしまう可能性がある。編年案とは、常に実際の遺跡において運用することを目的としなくてはならないと考える。限界はあると思われるが、器種毎に分類を行い型式学的な変化を検討する方が、遺跡から出土した資料の器種に偏りが見られた場合でも、実際に遺跡に編年案を適用した際に実用度が高い。

第三章の特に弥生時代後期の外来系土器に関しては、東海系の土器に主眼が置かれているが、中部高地系や北関東系の土器群についても今後検討を加えていく必要があると思われる。中部高地系の土器群に関してはその分布の中心が、鉄器や玉類の流通経路に存在することから、非常に重要である。また、時期は降るが北関東系土器群の、特に霞ヶ浦沿岸に分布の中心がある「上稲吉式」に関して言えば、土器だけでなく住居単位で移動している例が南関東地方においても指摘されている。このような移動形態は北陸系土器の移動とも類似している。古墳出現期における移動の史的背景や、他地域からの移動を受容した集落の検討を行うことで、当時の社会構造に迫ることも可能であり、今後重要な検討課題となるとと思われる。

第五章では主に、移行期の関東地方内における内的な変化を検討しているが、筆者が該期の研究をする中で最も強調したい点はこの在地の内的変化についてである。従来、弥生時代後期～古墳時代前期という移行期は、畿内・東海という二元的な波及論が通有であった。関東地方内でそのような研究が進展しなかった原因としては、上述したように編年案の抜本的な見直しが必要であったことが大きい。また、比田井は内部的な契機についても触れているが、今後は当該期において関東地方内部でどのような地域間交流があり、どのような特色を有していたかを小地域毎に検討していく段階にあると思われる。そしてその研究の為には小地域内において適用可能な編年案の検討がやはり課題として横たわっている。そしてその編年案を運用し、今後は土器以外の遺物、例えば石器・鉄器・土製品・玉類等に目を向けていく必要がある。石器や鉄器、玉類等のある程度入手ルートが限られるものや、生産地が限られるものを検討対象とすることで、土器が移動する具体的な背景や土器の移動とは関わりの無い地域間交流等も描きだすことが可能と考えられ、より研究を深められると思われる。勿論、墳墓や竪穴住居等の遺構も含まれる。非常に険しい道ではあるが、このような検討を行うことでより豊かな地域間交流の実態やその社会的背景に迫ることができると考えている。

また、畿内・東海からの古墳文化の二元的な波及論では説明し難い遺跡も多く存在する。例えば千葉県木更津市に位置する高部古墳群等である。高部30号墳も同様であるが、32号墳では畿内的な要素と考えられる鏡が出土するが、土器の主体は東海系が多く、尚且

つ墳形は前方後方形を呈している。このような事例を考慮するともはや畿内・東海の二元論だけでは理解が難しい。東日本の該期の研究者は概して視点が西日本に偏りがちであるが、高部古墳群のような錯綜した様相を理解する為には、各地方が独自に持っている地域間交流やルートを考えなくてはならない。今後当該期の研究は、小地域を対象として総合的な視点で研究を進め、在地の様相を明らかにし、より豊かな歴史像を検討していくことが課題となる。今後に残された課題はあるものの、比田井の一連の研究とその著書は、関東地方の弥生時代後期～古墳時代前期に関して、重きを置かれてきた西日本だけではなく、関東地方において理論的な研究が土器の実証的な研究を基に行われており、現在当該期の研究の一つの到達点を示すものであろう。

(比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』 雄山閣出版)